

五バツ



2021 秋季号 138

北海道ボランティア・レンジャー協議会

ホームページ



<http://voluran.com/>

目 次

2021年 秋季号 138

巻頭言	被子植物と裸子植物の受粉の違い	副会長 小林 英世	1-2
投稿	ボランティア・レンジャーに加入して	札幌市厚別区 蔵谷 徳洋	3
〃	昆虫が減っている～オホーツク支部会報から	網走市 法師人 春輝	4-5
〃	西岡レクの森	札幌市西区 菅 美紀子	6
〃	カラス ～ハシブトガラスとハシボソガラス	千歳市 宮本 健市	7-9
〃	なぜ多い? 「イヌ」の名前 <カラー面>	札幌市清田区 堀川 勉	10-13
〃	判官館森林公園	苫小牧市 谷口 勇五郎	14
トピックス	谷口勇五郎さんの「生物図鑑」出版について	苫小牧民報	15
話題提供	野幌森林公園のシダ植物観察	江別市 阿部 徹	16-17
〃	コロナ禍で消えそうになった話題提供 ～ セイヨウタンポポとブタナ	札幌市手稲区 原田 和彦	18-19
自然観察NOWNo. 57	シロチョウの仲間とコンロンソウ	江別市 藤田 潔	20-21
投稿	私の散歩道(続編)	江別市 吉田 安正	22
事務局だより	第1回役員会の報告	事務局	23
	「会員の近況」コーナー(新企画)	編集部	24
お知らせ		事務局&編集部	24-裏見返
編集後記		編集部	裏見返
エンブレムと奥付			裏表紙

2021秋「エゾマツ」138号/表紙の写真説明

札幌市厚別区 藤吉 功



この季節、森歩きで楽しみな“果実たち”のスナップです。

写真左上から時計回りに、①ユリ科オオアマドコロ。高さ1m前後になり、果実は葉腋に概ね2個ずつつきます。②ボタン科ヤマシヤクヤク。袋状の果実が熟して開くと、真っ黒い種子と赤い偽種子が、まるでザクロのようです。③サトイモ科コウライテンナンショウ。果実は青色から熟すと赤く色づきます。④キンポウゲ科ルイヨウショウマ。果実は、黒く熟し、横or下向きにつきます。⑤メギ科ルイヨウボタン。球形の裸種子が2個ずつ並んで双頭状になります。⑥ラン科ツチアケビ。子房が長さ10cmくらいに成長し、アケビ状の果実(バナナのような形)になって真っ赤に熟し、垂れ下がります。

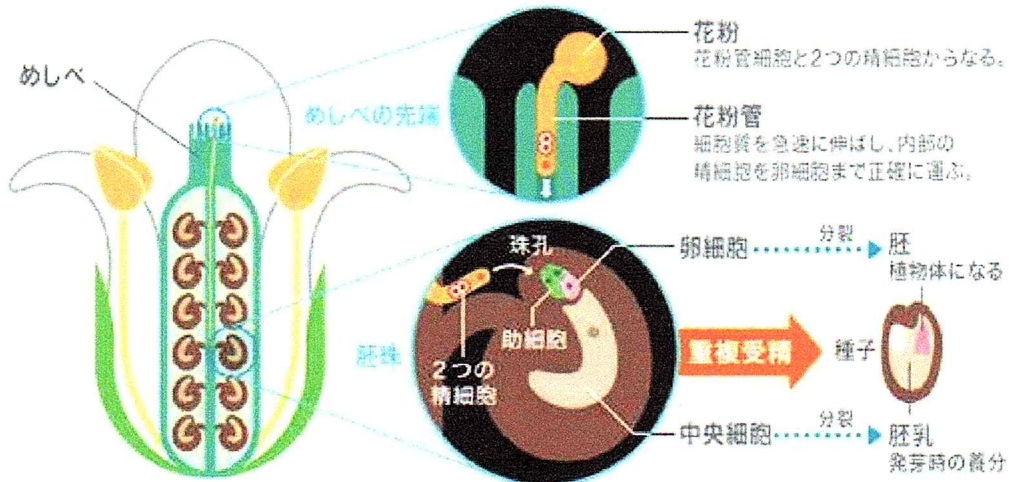
サクラの花糸が受粉すると赤くなる。この事で調べてみると、めしべの先端である柱頭に花粉が付くと、花粉からは花粉管という管が伸びていきます。花粉管が向かう先はめしべの根本、子房の中にある胚珠です。胚珠の内部には胚のう（胚嚢）とよばれる雌性配偶体があります。

胚のうにたどり着いた花粉管を経由して、精細胞が送り込まれると、胚のう中の卵細胞と受精、卵細胞は胚へと発達していきます。さらに、もう1つの精細胞によって中央細胞という細胞でも同時に受精が起き、胚乳が出来ていくのです。これが受粉で、その時の花粉管が伸びる過程で紫外線の影響を抑えるために赤くなるそうです。そこで、裸子植物はどのように受粉するのかという疑問に私は直ぐにたどり着かず、某指導員の道庁前の観察会に久しぶりに出かけようと思い、街中で草本があまりないので、話題となる物を調べている過程で、イチイの雌雄の違いの説明を行おうと調べていて、雌花（裸子植物では花がないので便宜上使用）に珠孔なる物が有ることが分かり、さらに受粉滴で受けて受粉することが分かったのです。普段から勉強熱心なボラレンの皆さんにしてみれば今更感が否めませんが、そこでちょっと調べてみました。

海で生まれた植物が上陸し、乾燥した陸地でも繁殖できるようになる過程で大きく変化したものの一つに受精のしくみがあります。コケやシダ、裸子植物までは精子は水中を泳ぎ、鞭毛の遺伝子が存在しますが、被子植物ではそれがなくなります。花粉管が素早く伸び、精細胞を卵細胞に送るという陸上に適応した受精に変わります。このとき卵細胞の隣にある助細胞が誘引物質を出します。花粉管が取り込んだ2個の精細胞のうち、1つが卵細胞、もう1つは中央細胞と融合して、前者は胚、後者は胚乳になります（重複受精）。胚が常に胚乳という栄養分と共にあり、荒地でも発芽できることが被子植物の繁栄を支えました。めしべの子房の中に作られ、後に種子となる器官。外側は厚い珠皮などの組織に覆われ、内部には卵細胞・中央細胞・助細胞などが納められています。ふつう胚珠には一カ所だけ孔（珠孔）が開いており、花粉管はそこを通過して胚珠の中に進入します。

藻類として海に現れた植物は、今から約5億年前陸上に進出し、裸子植物から被子植物へと進化し、徐々に乾燥した土地へも広がっていきました。現在最も繁栄している植物は、花を咲かせ実を結ぶ被子植物です。藻類約33000種、コケ約26000種、シダ約15000種、裸子植物約800種は精細胞が自力で泳ぎ、重複受精をしません。被子植物約240000種は自力で泳がないで、重複受精します。藻類から裸子植物までの受精は、鞭毛や繊毛を備えた雄の配偶子が水の中を泳いで雌の配偶子に出会うというしくみがほとんどです。上陸後の植物にとっては、限られた水をいかに効率よく利用して受精するかは、種の存続をかけた最重要課題の一つだったに違いありません。コケやシダの精子は、雨水など周りの環境から得られる水を頼りに卵細胞までたどり着く。裸子植物（マツ類、イチョウ）では、風で飛んできた花粉が、むき出しの胚珠の先端から出入りする液滴（珠孔滴）につかまって胚珠の中に引き込まれ、その後数ヶ月かけて胚珠内をゆっくり伸長する花粉管の中で2つの精子が形成されます。花粉管から泳ぎ出した精子は、胚珠を満たす水の中を泳ぎ、卵細胞に到達して受精します。しかし、被子植物になると精細胞の運動能力が失われ、新しい受精のしくみを獲得する。それは重複受精と呼ばれ、20万種を超える

被子植物に共通のしくみです。重複受精は、水の少ない陸上環境に適応し、素早く種子形成



するという特徴を持つ。砂漠に降った雨で種子がいつせいに芽吹き、花をつけ、水が干上がる前に次世代の種子をつくる様子は、まさに被子植物の

適応能力の高さを示し、これが繁栄をもたらすと考えられます。

被子植物の精細胞（配偶子の形態・機能に雌雄で著しい違いがあるとき、雄の配偶子のうち運動性を持つものを精子、持たないものを精細胞と呼びます。）もはやイチョウの精子のように泳いで卵まで到達することはできない。そのかわり、時速数ミリメートルという植物としては非常な速さで花粉管を伸ばし、すばやく精細胞を胚珠に送り届ける。花粉管は、一個の花粉管細胞が細胞の一部を長く伸ばして作る構造である。花粉管細胞の中には、エンドサイトーシス（細胞が外界の物質や細胞などを、細胞の中に取り込む現象。細胞膜の一部が取り込もうとするものを徐々に取り囲み、次にそれが陥入し、次第にくびれて細胞膜から切り離され、最終的には膜に包まれた構造として細胞内に取り込む。飲食作用。）によって生じた膜に包まれた二つの精細胞があり、花粉管が高速で伸びるのと一緒に先端へと運ばれていきます。被子植物と裸子植物にこのような差があった事に自分の知見の無さが分かった次第です。



写真説明 左側：イチョウの雌花の珠孔液、中央：イチイの雌花の珠孔液

右側：ハイイヌガヤの雌花と珠孔液（胚珠先端の珠孔から珠孔液を出している）

出典／東山哲也氏「生命誌ジャーナル」（被子植物の繁栄を支える重複受精の瞬間を見る）より

ボランティア・レンジャーへ加入して

札幌市厚別区 蔵谷 徳洋

2018年10月に「北海道ボランティア・レンジャー育成研修会」へ参加させていただいてからもうすぐ3年という時期になり、ようやくではありますが皆様の仲間入りを果たしました。

私はもともとアウトドア活動が好きで釣り、キャンプ、登山のほかヨットなど自然の中で多くの時間を過ごしてきたものの、動植物に関する知識はあまりに乏しく、少しでも学べないかという知的好奇心からボランティア・レンジャー育成研修会に応募しました。その後、数度の観察会参加を経て研修会は無事修了したものの、ガイドを実施する側としての実感が湧かなかつた為すぐには入会せず、自分なりに少し森を歩いてゆっくり観察し、知識を蓄えることから始めました。

初めの頃は名前がほとんどわからず、覚えるため重たい図鑑を何冊も持ち歩いていましたが(植物、鳥、昆虫、木、キノコ、シダ・よくばりすぎました。)体力的にきつく、最近ではカメラを持ち歩きわからない物を撮影して家で調べるというスタイルに落ち着きました。自分なりの散策スタイルで楽しんでいるうちに、昔よりも自然に慣れ親しむことができているのではと感じてきています。最近では、家族であちこちのフィールドを散策して歩く事も増えています。最初は、子供と一緒に「これは何だろう？」と調べたり同じ目線で楽しんでいましたが、いまは少しですがいろいろと説明をしたり名前を教えることができるようになってきましたが、子供の方が先に「これは〇〇！」と昆虫などの名前を答えたり、うかうかしていられません…。ここ数年は熊騒動、台風被害による倒木搬出、そしてコロナ禍による催事の中止・制限が続き、楽しみの一つだった観察会の下見にも参加できず辛抱が続いていますが、許される範囲で散策を楽しめたかと思えます。

なぜ、今回入会を決断したのかというと、いつも園内で出会うボラレンの先輩方に「新人が入らず困っている」と幾度も声をかけていただいたというのがありますが、観察会の下見に参加できることや会報エゾマツなどを読むことができる等、より多くの知識を得たいという思いからでした。そして、日々変化し違う顔を見せる自然に、驚きと興味を引かれつづけ魅力を感じている事が大きいと思います。また、最初の頃は「やるからにはたくさん知識を得て解説できるようにならなくては！」という気負いがありましたが、自分が沢山楽しむことから始めて、その楽しさや魅力を人に伝え共感してもらえたら、それだけでとてもうれしいことなんだと、少し気楽にかまえられるようになってきたからだと思えます。ですが、最低限の正しい知識はやはり必要と思いますので、これからも日々精進いたします。

今は、新型コロナが依然として猛威を奮い終わりのみえない状況に、以前と同様の活動は可能なのかと不安な思いもありますが、最近身近な脅威となり数を増しているデルタ株などの新型コロナが、ウイルスとしては「多様に遺伝情報(RNAかな?)を変化させ今の環境でより強いものを残していく」という進化の過程と考えると、散策していて感じる自然のたくましさや神秘的なものも、これと同じなんだなあ...と少し複雑な気持ちになります。これからのボラレンの活動も、withコロナ、アフターコロナなどの状況に適した活動で、沢山のアイデアや多様な試みで強く変化していけたらと願うとともに、強く変化するための一助になればと思います。これからも気軽に声がけいただき、またいろいろなことを教えていただきながら、皆様と自然の中で“自然案内人”として活動できるようになっていきたいと思えますのでよろしく願いいたします。

昆虫が減っている

網走市 法師人 春輝

6月の中旬から、10月中旬まで4カ月間に亘り、1週間に1回のペースで漆山に漆掻きに出かけています。網走の自宅から東へ約25kmの山里地区にある岩手県から取り寄せた漆を植林した山です。四駆でなければ無理な急斜面の林道を直登すると1ha程の開けた場所に樹齢20～25年のウルシが400本程育っています。自然林に囲まれていて時々熊出没注意の看板が立つ所です。

さて、そんな4カ月間の山仕事で特に気になることがありました。それは令和元年の季節、極めて昆虫が少ない様に感じたこと、いや少なかったのです。漆山は人の手で保全されていますが、今迄は普通に虫たちはいたように思います。

春はエゾハルゼミに始まり、夏はコエゾゼミ、ジャノメチョウ、オオヒカゲ、ヒョウモンの仲間、トンボはオニヤンマが上がって来たり、甲虫類はカナブン、カミキリ虫の仲間等々、また漆の葉を食害するクスサンやスズメバチなども頻繁にやって来ます。山菜が採れる初夏、晴天の日は、エゾハルゼミが一斉に鳴きだし、山全体が躍動感に満ち溢れます。令和の始まりは5月下旬に気温が30度を超えたため、この間に羽化したセミはラッキーでした。

しかしこの年、オホーツクの短い夏の間、虫たちは一体どこに行ったのかと思う位いなかったのです。キリギリスひとつとっても山へ向かう草むらから鳴き声は聞かず仕舞いでした。秋になると毎年のように向いの土手のヨモギの中で鳴いていたカンタンの声もとうとう聞けませんでした。

一方、漆掻きにとって一番危険なスズメバチ達はいつも通りの来襲、それでも多くありません。



やぶ蚊も少なかったように思います。漆の葉が好物のヤママユガ科のクスサンという蛾がいます。終齢期幼虫は薄緑色の結構可愛い毛虫ですが、毎年うるさい位木に登って来ます。これも僅かしか見ません。カナブンなど甲虫類も少なかったように思います。漆山全体がひっそりと静まり返り、遠くから聞こえるキジバトの声だけが物悲しさを際立て、寂しい山の姿が印象に残りました。

写真：山繭、クスサンの成虫（羽化直後）

この年は特に少なかったことを気にしつつ山仕事を終え、数週間後、何気に付けていたテレビのNHK ニュースから、日本の蝶類が大幅に減少していると聞こえて来ました。特にミヤマカラスアゲハは1年で平均34%も急減したと言います。イチモンジセセリは確か7%位減とのことで、自分の感覚と報道がピッタリ当たっていて驚愕したことを覚えています。やはり、全国ベースで減少していたのです。いや、後で解りましたが世界的規模で昆虫の減少が起きていたのです。

一方、モンシロチョウはうちの家庭菜園のブロッコリーに卵を産み付けるために毎日のように来ていました。しかし、考えてみればうちの庭も虫達が好む花も無く、野菜と木だけのつまらない庭だということに気付いたのです。カラスアゲハはもとより、セセリチョウ、アキアカネも見えていません。私が子供の頃住んでいた北見の「高台」にあった家の庭は、グラジオラスやルピナス、ギボウシ、ユリ、ケシの仲間、マーガレットの群落、名前が解らない色取り取りの花々が吸蜜植物として蝶や虫たちを引付けていました。また馬鈴薯、ゴボウ、トウキビを始め数々の野菜たち、杏子や

梨などの果樹、そしてイワギキョウなど高山植物、シクナゲなどの庭木たち等々、小さな生態系を維持していたような気がします。

花の周りはハナムグリやテントウムシなどの甲虫類、素早く飛ぶセセリチョウ、ハチドリのようなホバリングをして花から花へ吸蜜するスズメガの仲間も良く来ていました。またカラスアゲハのチョウ道にもなっていました。

夏が終わる頃には物置の壁に目まぐるしい数のアキアカネが止まり、深まる秋の光景として目に焼き付いていました。

昆虫が減少している実感を家人と話していた矢先、暮れ押し迫る頃、偶然にも昆虫が危機的状況にあることを取り上げた番組がNHKから放送されました。内容はこうです。ドイツでは昆虫全体が27年間で76%減少した、シドニー大学の教授の発表は地球上の昆虫は毎年2.5%減少している、日本ではアキアカネが99%減少した、植物の80%は昆虫に助けられていてこれが無くなることは食物連鎖の崩壊につながる、これらは大規模農業、都市化、地球温暖化が原因・・・というものです。この放送を見て地球上から昆虫が姿を消すかもしれないという危機感が更に押し迫ってきました。

里山が少なくなり、山は植林となり雑木林の減少はミヤマカラスアゲハの食草であるミカン科のキハダの減少にも関係していると思います。ミドリシジミやセセリチョウ、タテハ類の生息環境にあった北見の「氷池」周辺は住宅地になり、ミズナラやカシワの広葉樹林も見られなくなっていました。

環境破壊の一言で片づけるのは乱暴な言い方かも知れませんが、確かに都市化の進展と里山の減少、荒廃地の増加の影響はあると思います。

農村部を見てもTPPを始めとする貿易自由化の影響が小規模農家の廃業を余儀なくし、里山や屋敷林が消え耕作放棄地とともに農村が荒廃していく、小規模農業の維持を困難化させ、TPPに打ち勝つ大型経営体の推奨を大義名分とした農業政策が本来の農業の持つ多面的機能や生態系維持に少なからずとも影響を与えている実態も垣間見えてきました。

また地球温暖化の問題も避けて通ることは出来ません。地球温暖化のスピードに生物の移動が付いていけず絶滅の危険性が出ているという報告もあります。人類が地球規模の見地から生物多様性に重きを置き、国連が提唱しているSDGs（持続可能な開発目標）の理念を本当に実践していかなければ、手遅れになることは目に見えていると思います。

では、私個人としては何をなすべきか？

一つは、野菜ばかりを優先せず昆虫が好きそうな花を増やす。二つ目はブロッコリーに卵を産み付けに来るモンシロチョウをなるべく追い払わない。三つ目はボラレン活動の中で注意喚起をする。など・・・（ちょっと小さいか？）他に個人に出来ることがあれば教えて下さい。

最後に今年は虫たちが沢山、山や里、屋敷回りに集まってくれること、併せて皆さん方にとって良い年になります様ご祈念し終わります。

(参考) ・NHK 2019.12.28 放送「昆虫やばいぜ」
・「北見の蝶」木村辰正 著 北見育委市教員会（北網圏北見文化センター）発行
・「チョウと私」進 基 著 北網圏北見文化センター協力会発行

◆本稿は、オホーツク支部会報「流水 第20号」（2020 初春号）から、書式調製し、転載したものです。

8月24日、西岡植物の会のボランティア仲間たちと「西岡レクの森」の散策に出かけました。普段の活動と違い散策ということで幾分ウキウキ気分でした。

西岡公園の南側、月寒川右岸口から入って左岸口に出る4.5キロのコース。昨年は倒木処理のため入れなかったそうです（私は昨年から参加）。工事車両が入った遊歩道は広く歩きやすくなっていました。

入り口ではミゾホオヅキ、ハナタデ、キツネノボタンの花がお出迎え。次は実を付けたズダヤクシュとアカソこの二種は西岡公園には無いとのこと。フッキソウは実をつけている株がけっこうありました。クルマバツクバネソウに黒い実、なかなか実は付かず珍しいらしい。ミヤマタニタデとミズタマソウの花弁の先が二つに裂けているのをルーペでじっくり観察。

今日の一番の楽しみはミヤマウズラ。さっそく花2株発見、前は花70株まで数えたそうです。遊歩道は工事車両が入って大分痛められているので今回どうなっているかが気になっているようです。この先もずっとあるらしいので数えながら進みます。ツルニンジン実を付けていますが花もまだ咲いています。センボンヤリは閉鎖花が立ち上がっているところ。トウゲシバ、マンネンズギもありました。ウメガサソウ、コイチヤクソウ、ヤマホロシとヤマハハコは花が咲いています。マタタビの葉はまだ白色です。コクワの実も見つけました。イシミカワは実がもう美しくなっています。クルマバナの仲間3種（トウバナ属）



お目当てのミヤマウズラ イヌトウバナ、ミヤマトウバナ、ヤマクルマバナの違いを検索表と実物を見ながらケンケンガクガク。途中の林道で昼食、間隔をとって黙食。

林道にもミヤマウズラはあちこちに見られ、よく見ると花をつけてない株も多数見つけました。来年に期待がもてます。小さな橋の下からカワセミが飛び立ち美しい姿になんともうれしい気持ちに。その後、鹿に食べられたと思われるミズバショウの群生地、葉はほとんど無く茎だけが残っていました。林道の端にビロードモウズイカを見つけました。勢いこんでバスターズになり、しばらく歩いて行くと工事車両が出入りした斜面があつて、上の方に大きなビロードモウズイカが数本見えます。やはり引き抜こうと登って行くと広い緩衝地がカーブしていてその先にも続いていました。カーブの先をみて仰天。一面にビロードモウズイカが林立。ため息をついてなんとも悔しい気持ちでバスターズは諦めました。

西岡レクの森にはこの他カノツメソウ、ホソバノヨツバムグラ、ムカゴイラクサ、カラハナソウ、オオヤマフスマ、エゾスズラン、オニルリソウなどは実をつけていました。アキノキリンソウ、タニソバは蕾み、ツルリンドウは咲いていました。

ミヤマウズラは花の付いた株は30株でした。前回の70株には及びませんでした。若い株が多数見られたので来年に期待がもてました。まだ汗ばむ森の中でしたが、ところどころで吹く風は秋の気配がする西岡レクの森散策でした。

カラス

千歳市 宮本 健市

	<u>ハシブトガラス</u>	<u>ハシボソガラス</u>
学名	Corvus macrorhynchos	Corvus corone
英名	Jungle Crow	Carriion Crow
漢名	嘴太鳥	嘴細鳥
アイヌ名	シパシクル	カララクカムイ
生活の場	市街地や都市部	木立の点在する農村部漁村部
サイズ	L57cm W105cm	L50cm W99cm
嘴	太い	細い
額	盛り上がる	平ら
鳴き声	カー カー	ガー ガー
鳴き方	体をすこし上下させて	頭を上下させてお辞儀
歩き方	ホッピングが多い	ウォーキングが多い
営巢中の攻撃性	強い	弱い



写真:ハシブトガラス

2021.4 野幌森林公園では、営巢中の天然記念物・クマゲラが襲撃され、被害に。

北海道で見られるカラスの仲間はスズメ目 カラス科のハシブトガラス、ハシボソガラス、ミヤマガラス、ワタリガラス、ホシガラス、ミヤマカケスで、その中で日ごろ、よく見かけるのはハシブトガラスとハシボソガラスですが、どこが違うのでしょうか大まかには上記のとおりですがもう少し詳しく調べて見ました。

以下ハシブトガラスを「ブト」、ハシボソガラス「ボソ」と記述します。

ブトは南方系でボソは北方系です。

カラスは、他の野鳥と比べると学習能力が高く非常に頭の良い野鳥です。

市街地などでよく生ごみに群がりそれを散乱している所を見かけることがあります。各自治体などもことごとく手を焼いているところが多く、駆除するにも街中では猟銃を発砲することもできないことをカラスは皆お見通しなのでしょう。かといって罠で捕獲しようにも最初のうちは経験の少ない若鳥が多少かかる程度で学習能力が高くなかなか捕獲するのが難しいのが現状です。究極のカラス捕獲器が開発されない所以です。

寿命は約 15 年から 20 年とされています。嘴は物を噛む力が非常に強く(150kg/cm²) 食べ物を引き裂くのに都合良くできています。

アイヌ名のブトのシパシクルは、性格が荒く人を襲ったり悪事を働くから「糞ガラス」という意味です。一方ボソのカララクカムイは「カララクと鳴く神様」で貝を上空から落として割って食べたり、遊び心があり公園の滑り台や雪の斜面で滑って遊んだり、最近では車にオニグルミをひかせて割って食べたり、電線で鉄棒をしたりと頭が良いことを昔からアイヌ民族は観察していて神様の名を与えてなのでしょう。

体型はブトの方がボソより一回り大きく嘴もブトの方が太くて大きい。額はブトの方は盛り上がっていてボソの方は平らで慣れると見分けることができます。鳴き声はブトの方は体に似合わずカー カーと体を少し上下させて澄んだ声で鳴き、ボソはガー ガー頭を上下させお辞儀をするように濁った声で鳴くので声と鳴き方で遠くに居ても区別することができます。羽根はカラスにとって、とても大切なもので、日頃の手入れに怠りがありません。カラスの水浴びもその一つで、そのほかに蟻浴びといって蟻の巣の上で羽根に蟻を這わせたり蟻を嘴でつかみ羽根にすりつけ蟻酸でシラミなどが付くのを予防したり、薪を暖房の燃料にしている家屋の集合煙突で煙り浴びをしシラミが付くのを予防したり、日光浴も大好きで、ある天気の良い日に芝生の上で羽根を広げてうっとりとしている「危ない顔をした」カラスを見たことがあります。砂浴びもするようです。

生活の場はブトは(ヤマガラス)といわれて森林を好み一昔前は林の縁であったが最近人は人が排出する高級食材の生ゴミ(餌)に引き寄せられて都市部に移動しています。料亭から出た私など口にしたことのないような料理などを食べていてとてもグルメでリッチな生活をしています。

よく東京にはたくさんカラスがいて早朝など生ゴミに群がっているが、大阪にはカラスがいないと言われます。なぜかというゴミの収集時間が東京は朝なので生ごみにカラスが群がり大阪は深夜なので生ゴミがなくカラスがいないのです。ガラスを撃退するには兵糧攻めが一番とよくいわれます。ボソは(サトガラス)といわれて開けたところを好み木立の点在する農村部や漁村部などで生活していて畑を耕しているトラクターの後に付いて歩き昆虫の幼虫をたべているのを見かけることがあります。

食べ物はブトもボソも雑食性で木の実、昆虫、小動物や野鳥などで。木の実にはヤマグワ、イチイ、オニグルミ、ハリギリ、ホオノキ、ツタ、ナナカマド、エゾニワトコなどを食べていて種子はペリットとして吐き出し森造りに一役かっています。

昆虫では甲虫類やその幼虫、トンボなどで特に子育て中の雛の餌は甲虫類の幼虫が多く公園の芝生を剥がして幼虫を探したり空港の芝生に大群で集まり幼虫を探して航空機の運航を止めたりと問題になります。

シジュウカラなどの野鳥を襲うときは巣の近くで巣の中の雛の鳴き声を聞いて巣立つ時期を判断し巣立つ瞬間を襲います。巣立った瞬間の雛が直線にしか飛ぶことができないことを学習しているようです。

餌の少ないときは貯食をしていて、それを食べて空腹を満たします。貯食の方法は日持ちの良い物としないものを分けて貯食し日持ちのしないものから食べることが知られています。一週間くらいなら餌がなくても貯食で生きていられます。

喉には食べ物を入れる袋(63ml)があり貯食や雛への餌やりは喉の袋を使って運びます。

餌などを探して歩くときはブトは両足をそろえてホッピングが多く。ボソは足を交互に出してウォーキングのことが多いので遠くからでも区別することができます。

カラスは一度番いになると一生添い遂げるといわれていて、夫婦仲が大変良く電線にたくさん止っているカラスは雄雌 雄雌と夫婦で止っているらしいのですが見た目には雄と雌は区別することが困難です。オオハクチョウ、コハクチョウ、マガン、ヒシクイなど外観で雄雌の区別ができない野鳥はだいたい一生番を解消しないといわれています。

カラスは3月下旬から雄と雌が共同で巣作りをはじめ、高い木の上の枝の間や電柱の上などに巣を作ることが多いです。土台には太めの枝などを使い、最近ではクリーニング店が使う針金のハンガーを使うため電柱の巣では電線に触れてショートし停電の原因になるため電力会社はカラスの巣を撤去するため苦勞を強いられています。最近ではハンガーにこだわり土台がいろいろの色のハンガーだけという美しい巣を見かけることがあります。色を識別できるので美的センスがあるのかも知れません。

産座には軟らかく保温性の高い動物の毛(冬毛が抜け替わった物、エゾシカなどの事故死した物の毛)、犬の毛(特に老犬の背中に乗って毛をむしり取る老犬にとっては受難の季節)などで雛にとっては実に居心地が良いように造られています。産卵は3~5個の場合が多く、抱卵(順次抱卵)は雌の役目で雄は付近の警備や雌への餌運びなどで結構いそがしいです。

余談ですが、昔から童謡で「カラス なぜ泣くの カラスは山に 可愛い 七つの子があるからよ」と歌われてきましたが昔のカラスは、多産だったのでしょうか。または七歳にもなるまで子供を育てたのでしょうか。実は人の子供にたとえたものらしく昔は子供の死亡率が高く七歳まで育てば一安心ということから巣には元気に育っている可愛い子供がいると歌ったものらしいです。

秋から冬にかけて夕方になると人があまり立ち入らない公園の林などを集団でねぐらし数百羽、時に

は千羽を超える大群になることがあります。

よくカラスに襲われたと新聞などに報道されることがありますが人を攻撃するのはブトの方でボソは人を攻撃することはまずありません。ブトが人を攻撃するのは子育て中の一時期で特に雛が卵からふ化してから巣立って飛べるようになるまで(巣立ってもしばらく飛ぶことができず巣の近くの木に止っていることが多い)の間、親は非常に神経質(マタニティーブルー)になり、この時期巣の近くや雛の近くを通ると攻撃の対象となります。カラスは前述したように非常に頭が良く石を投げられたり、いたずらされた人の顔を覚えていて何度でも攻撃されることとなります。攻撃の方法は人の背後から低空飛行で接近し足の爪で頭を蹴る方法で流血を見ることもあります。攻撃する相手も弱い人を攻撃します。1 子供 2 老人 3 女性の順で確率が高く、まず屈強な青年を攻撃することはありません。自分が危ないことを理解しています。攻撃の前には予兆があるので、ある程度攻撃を回避することができます。1 大きな声で鳴いている 2 鳴きながら巣の付近や雛の周りを旋回する 3 枝に止り嘴で枝をたたきコンコン音をだす 4 枝や葉を折って落とすなどの予兆があるときはその場所を離れたほうが無難でしょう。

攻撃されそうになったときの対処方法として頭の上に手を振らずにまっすぐに上げて歩くとよいらしいが人に会おうと「危ない人」に見られる可能性があります。手を振ると攻撃されたと勘違いし攻撃されます。間違っても反撃はしないことです反撃すると攻撃をさらに増長することとなります。被害防止のため空の巣は撤去しても良いですが卵や雛のいる巣を撤去すると鳥獣保護法に抵触するので注意が必要です。

野幌森林公園などでエゾフクロウのいる近くでカラスが騒いでいることがありますが、民話によると「カラスは、もともと白い鳥でしたがエゾフクロウの染物屋に白い色は飽きたので綺麗な色に染め変えを頼んだところエゾフクロウもいろいろと考えたあげく黒地に金色や銀色で模様を染めたら美しいと考え、いきなりカラスを黒く染めてしまい怒ったカラスはエゾフクロウを追いかけ回し、今ではカラスの飛ばない夜しか出歩くことが出来なくなった。カラスはいまだにガー ガー、カー カーと抗議して騒いでいる」というものがありますがエゾフクロウはカラスの巣の雛を襲うことがあるためにエゾフクロウがいると大群で集まり攻撃行動をして騒ぎます。エゾフクロウにしてみれば夜勤明けで眠いののに気の毒です。アメリカではこの習性を利用してフクロウのデコイでカラスを集め一網打尽に駆除する猟があるそうです。

サッカーファンなら御存じと思いますが日本サッカー協会のシンボルマークは3本足のカラスです両足で立ちもう1本の足で赤いサッカーボールをつかんでいるカラス「ヤタガラス」です。

漢字は「八咫鳥」咫(あた)は長さの単位で約18cmの長さです。八咫は8×18で144cmになりますが、そのような大きいカラスがいたのでしょうか？

古事記には神武天皇が大和朝廷を立てるために東征仲のとき和歌山県の山中で道に迷っていると、どこからともなく3本足のカラスが現れて道案内をしたと書かれています、これが八咫鳥です。

日本サッカー協会は日本に初めてサッカーを紹介したのが和歌山県那智勝浦町出身の中村覚之助(1878～1906)であり縁が深いことから1931年にシンボルマークに採用しました。

2011年に世界遺産に登録された和歌山県の熊野三山(本宮大社・速玉大社・那智大社)の神鳥でもあり大切に祀られています、特に那智大社の厄除けの護符牛王宝印は75羽のカラスで文字が書かれ「那智滝宝」ト書かれています。

アラスカの先住民はワタリガラスを天地創造の神とあがめトーテムポールにワタリガラスを彫刻し村の中に立てています。世界中にもいろいろのカラスの神事にまつわる話があり、やはりカラスはただ者ではないのかも知れません。

「たかがカラスされどカラス」です。カラスをテーマに2時間くらい観察会が出来そうです。皆さんも注意深く観察されてはいかがででしょうか。新しい発見があるかもしれません。

なぜ多い？「イヌ」の名前

札幌市清田区 堀川 勉

野幌森林公園の観察会である時、植物にはイヌの付く名前が圧倒的に多く、その大半は「役に立たない」「性質が劣る」といった悪い意味で使われていると話しました。すると、参加者の小学生らしい男児が「そんなことじゃ、綱吉さんに怒られてしまうよ」とつぶやき、驚いたことがあります。言うまでもなく、徳川幕府5代将軍の綱吉が、犬などの動物愛護令「生類憐みの令」を発したことは、学校の授業でも習う史実です。植物界での「犬蔑視」の現状を知れば、綱吉ならずとも愛犬家は眉をひそめるに違いありません。

では、イヌの名前はどれほど多いのか？ 岡山県の倉敷市立自然史博物館が「岡山県野生生物目録2003、2009」に収録の植物全種を調べた結果、十二支のうち犬にちなむ名前は83種あり、2番目は竜（竜胆など漢名に竜が付く種含む）17種、3番目は馬16種と続き、断トツの1位でした。一方、梅沢俊著「北海道の草花」（北海道新聞社）から拾い上げると、44種（全体の2.2%）見つかりました。以下は、樹木を含む一部の紹介です。

ハイイヌツゲ・アカミノイヌツゲ = 写真①②

将棋の駒や櫛に利用されるツゲは優良材とされていますが、似ているものの材質が劣るとされたのがイヌツゲ。その雪国適応型が、幹下部が地面を這うハイイヌツゲで、黒く丸い実を付けます。これに対し、同属のアカミノイヌツゲは鮮やかな赤い実が目を引きまします。

シウリザクラ（ミヤマイヌザクラ） = 写真③

瓶ブラシ状の花序に白色花を多数付け、道内の平地桜のトリを務めて開花するのがシウリザクラです。一方、道内に自生しないイヌザクラは、白い花が他のサクラ類に比べ見劣りするとされ、花序が似ているシウリザクラは、別名ミヤマイヌザクラとなりました。

ハイイヌガヤ = 写真④

最高級の将棋盤や碁盤にも加工される高木良材のカヤに、材質面では敵わないとして名付けられたイヌガヤ。ハイイヌツゲ同様、積雪地に適応したのがハイイヌガヤです。やや癖があるものの甘みが強い紅紫色の果実は、翌年秋にならなければ熟さない越年型です。

イヌコリヤナギ = 写真⑤

ヤナギ属の同定は難しいですが、道内で唯一、葉が対生するヤナギなので間違えようがありません。コリヤナギは昔使われた柳行李の材料になりますが、よく似たイヌコリヤナギでは代用できません。イヌ付きの所以です。花期の雄株は葯が紅紫に色付き印象的です。

イヌエンジュ = 写真⑥

春先は銀白色の新葉がひときわ目立ち、真夏にならないと開花しないイヌエンジュ。生薬として重宝されるエンジュに対し、薬効成分を含まないのでイヌが付きました。実際は、高級床柱など利用範囲が広く、木材業界でエンジュといえばイヌエンジュを指すそうです。

ヒメリング（イヌリング） = 写真⑦

ナシ状果は、よく見かけるズミやエゾノコリングより大形ですが、普通のセイヨウリングよりは小さく酸味が強いため食用価値が低い。別名イヌリングと言われる理由のようです。

イヌタデ=写真⑧

「蓼食う虫も好き好き」の蓼はヤナギタデのことで、葉に辛みがあって刺身のツマに使われますが、イヌタデは辛くもなく役に立たないということのようです。花をままごとの赤飯に見立てたから別名アカノマンマ、郷愁を誘われる人が多い野の花でもあります。

キンエノコロ=写真⑨

「犬ころ」から転じたとされるキンエノコロなどのエノコログサ類は、他の名前と違って侮蔑的な意味合いはほとんどなく、草姿を子犬の尻尾に見立てた形態由来の命名です。別名はネコジャラシで、名前に犬と猫が仲良く同居していて微笑ましくさえあります。

イヌゴマ=写真⑩

実がゴマに似ているが食用にならないのでイヌが付き、姿形がチョロギそっくりなのに食べられずチョロギダマシの別名まであります。薄紫の花を幾重にも付け、すくと立つ姿は清々しさを感じさせるのに、やはり食い物の恨みは恐ろしいということでしょうか…。

イヌヨモギ=写真⑪

蓬餅など幅広く食用に使われ葉裏の毛がお灸のもぐさになるヨモギに比べ、あまり役に立たないとしてイヌ呼ばわりされます。山林の傾斜地などで出会うイヌヨモギは、斜め下向きの花序や緩やかに切れ込む葉の様子が、他のヨモギ類にない奥ゆかしさを漂わせています。

イヌホオズキ=写真⑫

萼が発達して袋状になるホオズキの実に対し、黒いイヌホオズキの実は小さく袋になりません。このため、イヌが付いただけでなく花言葉が「嘘つき」という不名誉まで背負われています。毒草ですが、くるり反り返る白い花冠と黄色い雄蕊の対比が魅力的な花です。

タチイヌノフグリ=写真⑬

同属のイヌノフグリは、果実が犬の陰囊を連想させるための名前で、地方によっては必ずイヌノキンタマの呼び名もあるそうです。タチイヌノフグリは全体小形で目立ちませんが、目を凝らすと、花冠4裂片のうち1枚が小さいという特徴をしっかりと観察できます。

イヌガンソク=写真⑭

道内生息のシダ類では、ヤマイヌワラビと並び犬ゆかりの代表格。若芽（コゴミ）が食べられるクサソテツ（ガンソク）と違い食用に適さないとして付いた名前です。大きな栄養葉はよく目立ち、雁の足に例えられる胞子葉は冬も残り花材として使われるようです。

以上、イヌの付く名前をいくつか挙げましたが、他の動物と違い、なぜこうも侮蔑的な使われ方なのでしょう？ 古今東西を通じ、人間社会にも「権力の犬」「犬侍」などの蔑称が数多く存在します。「犬の日本史～人間とともに歩んだ一万年の物語」（谷口研語著）によると、犬は忠実・従順さ故に蔑みの対象となったが、一方で人には、犬のように呑気で幸福に過ごしたいという「犬願望」もあり、蔑視の裏に屈折した心理が働いていると説明しています。私はやはり、野犬や狂犬病への恐怖感が根底にありはしないかと考えています。

植物界の実情は、まあ犬にはどうでもいいことであり、定着した名前は今さら変わらないでしょう。犬はあまりに身近すぎて、愛憎相半ばということなのかもしれません。

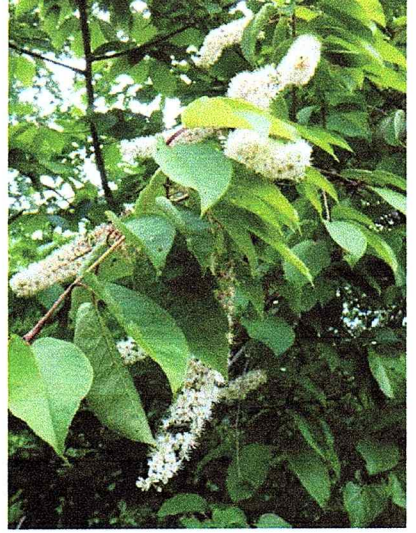
<イヌの付く名前1 = 樹木>



①ハイイヌツゲ



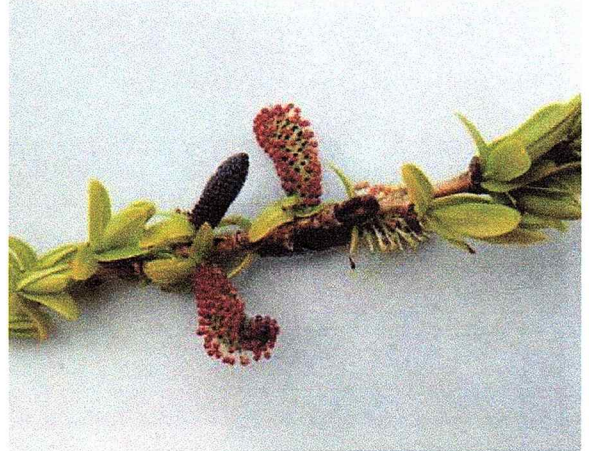
②アカミノイヌツゲ



③シウリザクラ (ミヤマイヌザクラ)



④ハイイヌガヤ



⑤イヌコリヤナギ



⑥イヌエンジュ



⑦ヒメリンゴ (イヌリンゴ)

<イヌの付く名前2 = 草本>



⑧イヌタデ



⑨キンエノコロ



⑩イヌゴマ



⑪イヌヨモギ



⑫イヌホオズキ

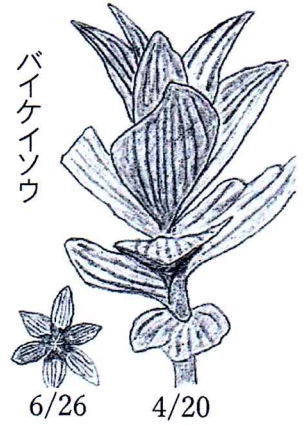


⑬タチイヌノフグリ



⑭イヌガンソク

6月14日、数名で新冠の判官館森林公園に出かけました。晴れた風のない日でした。10年以上前の時は、5月でオオバナノエンレイソウやカタクリが咲いている時期でした。土地が肥えており、草はよく茂っています。オオハナウドが至る所に咲いています。大型のセリ科はどれも似たような花と葉なので区別が難しいのですが、これは3出複葉とかいい大きな葉が3つに分かれ、それらは切れ込んだ葉を持っています。頭をひねったのはセリ科らしい葉が細切れになっている3出羽状複葉とかいう難しそうなおもてなしでした。ミヤマセンキュウは秋に咲くので、今咲いているのは多分シャクですね。シャクの写真が欲しく、植物に詳しい方に聞くと、当市、アルテンの少し手前の覚生川に架かる橋のたもと、クルミの木の側にあった、と言うので行ってみると、ありません。止むを得ず、札幌の植物園に行くと、時期が過ぎて果実になっていました。次の年は何とか花を撮ることができました。苫小牧では最近になり1ヶ所で見ました。目前にあるシャクの柄の付け根にある白いハカマを確認しました。今度は、太い茎のセリ科が所々に生えて、先端につぼみがあります。エゾニュウと思います。大型のセリ科3種に圧倒されました。園内を進むと高台に黄色っぽいユリが咲いていました。橙黄色と判断してゼンテイカと思いました。エゾキシゲの方は黄色で、微妙な違いです。前者は葉の幅が1.5~2.5cmで先が垂れ、花柄は短い。後者は葉の幅が1.5cm、花柄が長いといひます。葉の幅などは帰宅後に図鑑を確かめてのことです。誰かが、「あの小さい白い花は何か」、の声をしました。その葉をかき分け、茎の根元は3叉になっていません。葉の脈が縁まで達しているところから、ヤマブキショウマです。バイケイソウは70cm程もあるのですがどれも枯れかけ、倒れそうになっています。すべて花が咲いた様子はありません。春植物のように広葉樹が葉を茂らせる前に、1年分の仕事を終え休眠するのでしょうか。6月26日、ポロト湖畔を一周しました。バイケイソウの大きな群落が4ヶ所ありました。腰程の高さになり、どれも半分枯れ、倒れています。道端の3本が青々として花を咲かせています。最後の群落では1本だけ元気に50cm程の花茎に花を沢山咲かせていました。トリカブト程ではないけれども猛毒です。エゾトリカブトも生えていたので葉裏がヨモギのように白くないのを確認しました。判官岬には東屋があり、海の方や、新冠町の方面には綿雲がかかり眺めは素晴らしいものでした。近くにカシワが1本生え、雄花は散り、葉の間にドンダリの芽生えがそれらしく見えます。オオハナウドやイネ科の草、スイバも多く見られました。



その後、別ルートから岬下の海岸に行きました。テンキグサやハマエンドウが一面に生えています。砂浜にオカヒジキが少し生え、コンブが数本落ちていました。新冠川の下流でもあるので、変成岩が直径3~5cmほどに円くなり、ぴかぴか光るものを含んでいます。岬は泥岩や礫岩などが50m以上も切り立ったものでした。その下を旧日高線のトンネルが通っていました。

○ 谷口勇五郎さんの「生物図鑑」出版について

ボラレンの仲間は、いくつかの資格を持ち、複数の団体に所属して活動されているケースが多いものと拝察します。そうした中、本誌に投稿のご常連でもある苦小牧市在住の谷口勇五郎さんは、私たちと同じ「自然解説員」の傍ら、日本自然保護協会認定の「自然観察指導員」などとして、幅広くご活躍されています。これまでも本誌、既刊の第115号(2016.1.29 冬季号)、第116号(2016.3.25 春季号)で、冊子『自然観察』などを続々刊行されている旨、お知らせしたところです。

このほど、20年余に亘る自然解説の集大成として『苦小牧の生物図鑑』<草木鳥獣虫>を自費出版され、地元紙である「苦小牧民報(通称;苦民)」に2021年7月5日付けで大きく報道されました。

苦民から当該記事の会報誌「エゾマツ」への転載に関する許諾を得、ここにご紹介します。

小 牧 民 報

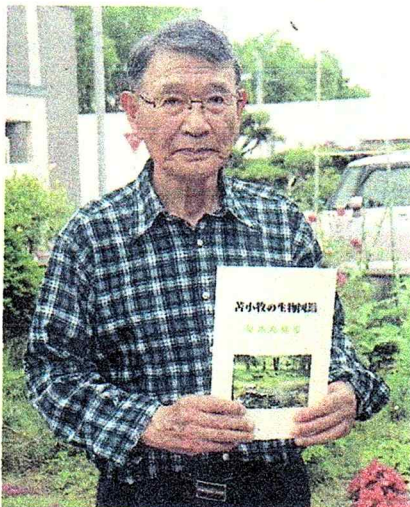
2021年(令和3年)7月5日(月曜日)

生物図鑑を自費出版

自然観察指導員 谷口さん「活動の総まとめ」

苦小牧市豊川町3の日本自然保護協会認定の自然観察指導員谷口勇五郎さん(81)が、「苦小牧の生物図鑑」を自費出版した。市内で日常的に見られる植物、昆虫、鳥獣計800種を収録。それぞれの特徴やよく似た生き物との違いを写真やイラスト、文章で解説している。自費出版5冊目で、初の図鑑。谷口さんは「自然ガイドを志す人、生物に興味のある皆さんの役立てば」と話している。

苦小牧の植物、昆虫、鳥獣計800種収録



完成した「苦小牧の生物図鑑」を手にする谷口さん

谷口さんは2000年、生物の教諭として苦小牧西高校を定年退職後、北海道自然観察協議会のボランティアガイドに登録。自然ガイドとして年に5回ほど自然観察会を開催してきた。家族連れや主婦、高齢者らにウトナイ湖、支笏湖、高丘の森などで野鳥や植物を紹介する中で10年1月、自然ガイドのついでに「虫と自然ガイド」とした随筆集「虫と自然ガイド」を自費出版。その後、人から助言をもらい、ガイド

ドの傍ら撮影や記録をこつこつ重ねてきたという。図鑑はオールカラーB5判110ページ。写真はすべて自ら撮影した。標本もスジクワガタの雄の1点は知人から借り受けたが、その他は自作。名称や分類、大きさ、生態などの特徴を簡潔にまとめた。谷口さんは「自然は尽きない好奇心を満たす宝庫」と強調。「製作に取り掛かった頃は大それたことを始めたと思っただが、地元で普通に見られる生き物をほぼ紹介することができた」と胸を張る。2日には、図鑑を地元の苦小牧豊川小に寄贈した。100冊を発行。希望者には販売する。価格は1冊2000円(別途、送料300円)。問い合わせは谷口さん 電話0144(73)8912。

なお、編集子も早速1冊購入。フィールドで活写した写真がふんだんに盛り込まれ、簡潔な解説文などと相まって、ガイド活動における座右の書の一つにお勧め... と感じました。

希望者は、直接、谷口勇五郎さんへお申し込みください。

→ 〒 053-0831 苦小牧市豊川町3丁目2-12 TEL 0144-73-8912 @2,000円+送料300円

2021年6月9日(水) 江別市 阿部 徹

シダ植物はスマレのような花が咲かないので、私にはどれも同じ様な姿に見えて区別のつかない存在でした。つまり、長い間シダ植物については全くの素人でした。それが何回かの下見会時に、シダ植物に詳しいボラレン前事務局長の室野文男氏から、いくつかのシダ植物の名前と特徴を教えてくださいました。興味関心を持つきっかけとなりました。また、同じ頃に梅沢俊著の「北海道のシダ入門図鑑」を購入して、実物を写真で確認できるようになったことも参考になりました。以下、シダ植物初心者の私が、野幌森林公園で観察したシダ植物の種類と覚え方について報告します。

1. 野幌森林公園のシダ植物

(1) 去年、観察したシダ植物の種類

(オシダ科) オシダ、ホソバナライシダ、ミヤマベニシダ、シラネワラビ、リョウメンシダ、サカゲイノデ、イワシロイノデ、ホソイノデ、ジュウモンジシダ、(メシダ科) サトメシダ、ヤマイヌワラビ、カラクサイヌワラビ、エゾメシダ、オオメシダ、ホソバシケシダ、ミヤマシケシダ、ウスゲミヤマシケシダ、ハクモウイノデ、(コウヤワラビ科) コウヤワラビ、クサソテツ、イヌガソク、(シシガシラ科) シシガシラ、(ヒメシダ科) ヒメシダ、ミゾシダ、ミヤマワラビ、(ゼンマイ科) ゼンマイ、ヤマドリゼンマイ、(コバノイシカグマ科) ワラビ、(チャセンシダ科) トラノオシダ、コタニウタリ、(イノモトソウ科) クジャクシダ、(ヒカゲノカズラ科) ホツバトウゲシバ、(トクサ科) トクサ、スギナ、(ハナヤスリ科) フユノハナワラビ、エゾフユノハナワラビ、ナツノハナワラビ、(ウラボシ科) オシヤグジテンダ……計38種

(2) 以前に、観察したシダ植物の種類

(イノモトソウ科) イワガネゼンマイ、(ウラボシ科) イワオモダカ、ホテイシダ、(ハナヤスリ科) ナガホノナツノハナワラビ……計4種

*私が野幌森林公園で観察したシダ植物の種類は、以前のものを含めると42種類です。梅沢俊著の「北海道のシダ植物入門図鑑」には、約155種類が記載されていますので、1/4強を野幌森林公園で観察したことになります。結構な種類が生えていることがわかりました。

2. 野幌森林公園のどのコースで見られるか

(1) どのコースでも見られるもの(個体数に差はあるが)

・オシダ、ジュウモンジシダ、ヤマイヌワラビ、コウヤワラビ、クサソテツ、スギナ、ミゾシダ、フユノハナワラビ、エゾフユノハナワラビ、ナツノハナワラビ

(2) 場所によって群生していたり数多く生えているもの

・ミヤマベニシダ(エゾユズリハコース、開拓の沢線、志文別線)、ヤマドリゼンマイ(エゾユズリハコース、志文別線)、オオメシダ(エゾユズリハコース、桂コース)、サトメシダ(志文別線)、トクサ(開拓の沢線)、サカゲイノデ(大沢コース、桂コース)

(3) 個体数が少なく限られた場所で見られるもの

・クジャクシダ(エゾユズリハコース、ふれあいコース)、ホソイノデ(瑞穂線、ふれあいコース)、ハクモウイノデ(志文別線、開拓の沢線)、ホソバトウゲシバ(エゾユズリハコース、瑞穂線)、ゼンマイ(大沢コース、志文別線)、エゾメシダ(エゾユズリハコース)、オシヤグジテンダ(志文別線)、トラノオシダ(志文別線、ふれあいコース)、イワシロイノデ(瑞穂線)

3. 種類を見分ける方法

(1) 生え方の形で分類⇒ロート状、株立ち、横に長く群生、孤立ち状

①ロート状⇒オシダ、サカゲイノデ、イワシロイノデ、ホソイノデ

②株立ち⇒ミヤマベニシダ、オオメシダ、リョウメンシダ、クサソテツ、ジュウモンジシダ

③横に長く群生⇒ミゾシダ、コウヤワラビ、ホソバシケシダ、ヒメシダ

④孤立ち状⇒エゾフユノハナワラビ、フユノハナワラビ、ナツノハナワラビ

- (2) 全体の大きさで分類⇒大型 (1m以上)、中型 (50 cm前後から1m)、小型 (50 cm以下)
- ①大型→オシダ、サカゲイノデ、ミヤマベニシダ、オオメシダ、イヌガンソク、ゼンマイ
 - ②中型→ホソバナライシダ、ヤマイヌワラビ、ジュウモンジシダ、ミゾシダ、ホソイノデ
 - ③小型→ホソバシケシダ、ミヤマワラビ、トラノオシダ、オシヤグジデンド、ホソバトウゲシバ
- (3) 春芽生えの時期に色がつくもの
- ・芽生えが赤くなるもの→コウヤワラビ、シシガシラ
 - ・茶色の毛 (鱗片) →オシダ
 - ・白い毛 (鱗片) →ヤマドリゼンマイ、ハクモウイノデ
- (4) 個体数が多く至る所で見られるので覚えやすいもの
- ・オシダ→ロート状の大型シダ、丸型のソーラス (胞子のう群) が葉裏面の上半分程につく。
 - ・ジュウモンジシダ→株立ちの中型シダ、葉全体の形が逆さ十字架なのはこのシダだけ。
 - ・ミゾシダ→長根茎から群生する中型シダ、葉形は長三角形で裏に線形ソーラスが2列に並ぶ。
- (5) 個体数が少なく一度見たら覚えられるもの
- ・形が美しいアジアタム→クジャクシダ、葉柄や中軸の鱗片が白く輝く→ハクモウイノデ
- (6) 越冬するもの (雪の下から緑葉で出てくるもの)
- ・エゾフユノハナワラビ、フユノハナワラビ、オシダ、リョウメンシダ、ジュウモンジシダ、サカゲイノデ、シシガシラ、コタニワタリ、トラノオシダ、イヌガンソク (胞子葉のみ)、ホソバナライシダ、ホソバトウゲシバ、オシヤグジデンド
- (7) 葉身や葉柄を含めた全体の形や大きさ、栄養葉と胞子葉は別々か、葉柄や中軸 (葉軸) につく鱗片の形や色、ソーラス (胞子のう群) の形やつく位置、これらを観察して分類する。

4. まとめ

- (1) 下見会時に先輩や仲間から教わったことや図鑑等で確認した、野幌森林公園でのシダ植物の種類や覚え方を記述しました。思い違いや誤りもあると思いますがご容赦下さい。以外と多くの種類があることと、一年を通して観察ができ楽しめることがわかりました。シダ植物は種類が少ないので、その気になればかなりの種類を覚えることは可能です。しかし、形が似ていたり雑種ができやすいとのことなので、同定するのはそれなりに難しいと感じています。
- (2) ワラビやクサソテツ (コゴミ) にゼンマイやヤマドリゼンマイは、山菜として食用となります。ワラビやクサソテツ (コゴミ) は、野幌森林公園内では減少していきなく他の場所でも見られます。しかし、ゼンマイは個体数が少なくヤマドリゼンマイは群生していますが場所が限られています。その中でもゼンマイは、芽生えの時期に採取されているのを何回か見ているので、今後ますます減少していくのではないかと心配しています。



<5月・芽生えが白っぽいヤマドリゼンマイ>

・中央の長く伸びて頭が黒っぽいのが胞子葉



<5月・若い栄養葉が紅色に縁どられるシシガシラ>

*参考資料

- ・『北海道のシダ入門図鑑』梅沢俊著
- ・『野外観察ハンドブックシダ植物』全国農村教育協会
- ・「ボラレンとシダ植物」室野文男氏投稿、エゾマツ 133号

2021年6月12日(土) 札幌市手稲区 原田 和彦

1、初めての話題提供

ボラレンのメンバーでありながら手稲在住なので野幌森林公園で行われる観察会には中々出られない。それでも以前は、1年に1度くらいは参加していたのが歳のせいもあって参加ゼロの年が続いている。そんなところへ、小林副会長から、「話題提供」の話があって9月4日の下見時の分を引き受けた。初めての話題提供でどんな話をしてよいかいろいろ迷ったが、身近な植物の話がよかろうと考え、「セイヨウタンポポとブタナ」の話に決めた。これは当日話をする予定だったもので、資料は当日お渡しする予定だったもの。

2、「新・北海道の花」のブタナに関する記述のこと

図鑑「新・北海道の花」は、植物観察のガイドする人間にとっては大事なバイブルである。ただ、ブタナに関する記述については気になる場所があった。「しばらくタンポポモドキとも呼ばれていたが、この名はすでに他の植物に使われているので、別名として使用すべきでない」となっている。

タンポポモドキという別種はどんな花なのか、いろいろ図鑑を調べたがどこにも載っていない。

3、ブタナの命名のこと

ブタナは帰化植物、「日本の帰化植物（平凡社）」という図鑑によれば、最初に発見されたのは札幌で、伊藤浩司氏によってタンポポモドキと命名された。翌年同じものが神戸でも発見されて、北村四郎氏によってブタナと命名され、ブタナのほうが標準和名になっている。

北村四郎氏は京都大学の名誉教授で植物学会の重鎮であるのに対して、札幌の伊藤浩司氏は無名の研究者だったので命名者にはなれなかったらしい。

ブタナはフランスなどで「豚のサラダ」と呼ばれていたといい、それでブタナの名がついたといわれる。学名の場合は命名規約があって、「先取権」で先に命名した者に命名権があるとされるが、標準和名にはそういうルールはないので、学会の偉い先生の方が優先されるようだ。ちなみに、伊藤浩司氏はネットの検索でも中々ヒットしないが、北海道植物友の会で平成6年に「北海道の植物分布」という講演をしていて、友の会の初代会長でもあるという。

4、セイヨウタンポポとブタナの戸籍調べ

- ・セイヨウタンポポ：タンポポ属。同属の自生種：エゾタンポポ。
- ・ブタナ：エゾコウゾリナ属。同属の自生種：エゾコウゾリナ。アポイ岳の固有種で絶滅危惧種でもある。同属でありながら、片や繁殖力旺盛な「要注意外来生物」、片や「絶滅危惧種」。

5、セイヨウタンポポとブタナの相違点

- ①、葉：鋸歯の在り方や毛の様子。
- ②、莖：枝分かれするか、しないかの違い。中空か中実かという違い、それと色の違い。
- ③、果実：何れもキク科で萼由来の冠毛がつき、冠毛と種子をつなぐ果嘴（かし）がつく共通点をもつ。

但し、セイヨウタンポポの冠毛が直毛状であるのに対して、ブタナの冠毛は羽毛状（枝分かれする）という違いがある。

くついでに>果嘴をもつ冠毛の例：直毛状のノゲシ型と冠毛状のアザミ型。

6、帰化植物も立派な観察対象：身近に観察出来る植物には帰化種が多く、これを除外する手はない。

1、属と同属自生種

セイヨウタンポポ

ブタナ

タンポポ属
エゾタンポポ

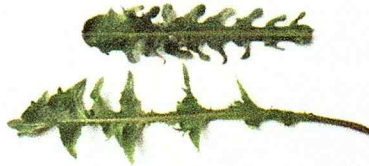


エゾコウゾリナ属
エゾコウゾリナ



2、葉：鋸歯と毛

写真：下
鋸歯：鋭い
毛：寝た毛、少ない



写真：上
鋸歯：鈍い(丸い)
毛：立った毛、多い

3、茎

写真1：下
枝分かれ：しない
写真2：右
中空、赤み

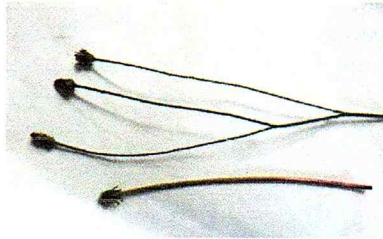


写真1：上
枝分かれ：する
写真2：左
中空、緑色

4、果実

果嘴あり
冠毛：直毛状



果嘴あり
冠毛：羽毛状

タンポポ型

ブタナ型

< 仲間の果実 > 果嘴なしのタイプ

果嘴なし
冠毛：直毛状



果嘴なし
冠毛：羽毛状

アザミ型

アザミ型

自然観察 NOW

NO : 57

野幌森林公園自然情報



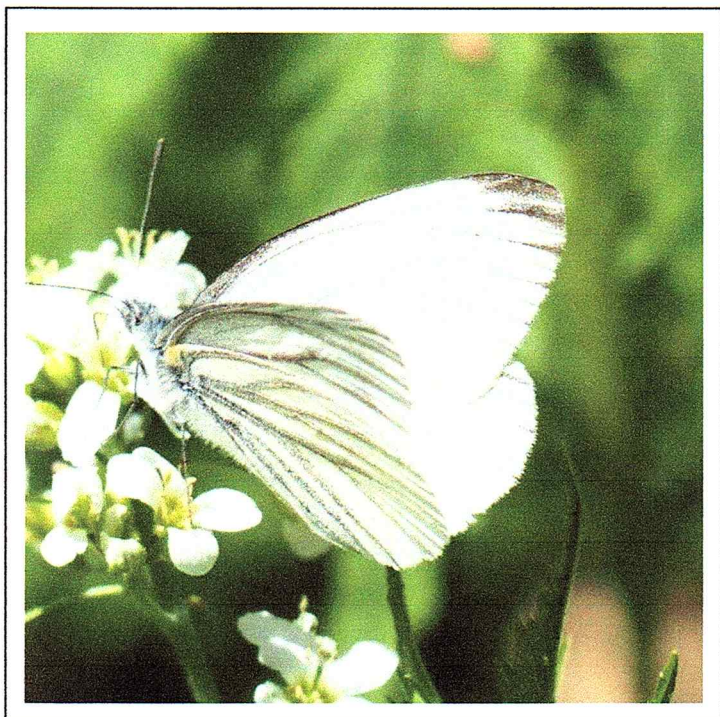
発行：2021年6月10日

北海道ボランティア・レンジャー協議会
ホームページ <http://voluran.com/>

シロチョウの仲間とコンロンソウ

この季節よく見かける風景を写真に撮ってみました。ご覧の通り白い蝶と白い花が写っています。

白い花の方はコンロンソウ。アブラナ科タネツケバナ属の多年草で低地～山地の林内や川沿いで生え、



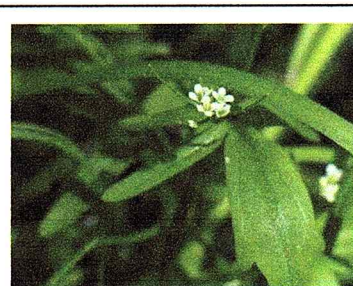
野幌森林公園でも遊歩道沿いの木漏れ日が当たるようなところで見られます。5月から6月にかけて咲き、白い十字型の花が印象的で白い小ぶりの花が多いこの季節でも草丈が30～70cm程あって割と目立つ方です。

ところで問題は蝶の方です。シロチョウの仲間であることは間違いないですが何という名の蝶でしょうか。候補としてはエゾスジグロシロチョウ(以下エゾスジ)、ヤマトスジグロシロチョウ(以下ヤマト)、スジグロシロチョウ(以下スジグロ)のそっくり3兄弟が挙げられます。

以前はこのグループもエゾスジとスジグロの2種だけだったので比較的解り易

かったのですが、エゾスジを道東に分布するグループとし、道南と本州に分布するグループはヤマトスジグロシロチョウという和名をつけて別種とすることが提案され、新種誕生と相成りました。つまり北海道にはこの似通った3種が混在することになります。特にエゾスジとヤマトについては形態上の絶対的な区別点はないとされ、容易に交雑することも示されました。DNA解析が進む中で形質データの解析も相まって現在も異種か亜種かの論議が続いており図鑑により(新旧によっても)記載内容は異なっています。ちなみに写真のモデルはヤマトスジグロシロチョウとしたいところですがいかがでしょうか。

分類問題はさておき、上記の3種のシロチョウはいずれもコンロンソウを食草としています。他にも野生種のアブラナ科の野生種も可であり遊歩道沿いで見かけたタネツケバナの



タネツケバナの仲間

仲間もこれも食べそうです。またコンロンソウ、フランスギク、シウリザクラでは吸蜜シーンを見ています。

シロチョウの仲間

シロチョウという名の蝶はいませんが前述の3種以外にもシロチョウの仲間がいるので何種類か紹介いたします。

<p>モンシロチョウ</p> 	<p>エゾシロチョウ</p> 	<p>モンキチョウ</p> 
<p>キャベツ、大根などが食草。</p>	<p>大ぶりの蝶で桜、リンゴ等で大発生し丸裸にすることがある。</p>	<p>黄色いがシロチョウの仲間</p>
<p>オオモンシロチョウ</p> 	<p>ツマキチョウ</p> 	<p>チョウセンシロチョウ</p> 
<p>外来種。1995年に採取されて大繁殖するも激減。寄生蜂のせい？</p>	<p>羽先がとがったシロチョウ。あまりみなくなりました。</p>	<p>迷蝶。1979年に北海道日本海側河川敷で1年のみ繁殖。</p>

Cyber 昆虫図鑑、公園昆虫記、Wikipedia ほか

<参考>

- ・北海道産 *Pieris* 属 3 種の形態上の差異について(1)
—春型と *nesis* タイプ標本— 小田康弘
蝶と蛾 *Lepidoptera Sciens* 67 (2) : 41-57, October 2016
- ・岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科 波田研ホームページ 2021/06/07
- ・二人の館 2021/06/07
- ・Wikipedia 他

6月・7月観察会の予定

- | | | |
|------|-----------|---------------|
| 6/10 | 森の新緑観察会 | 中止 |
| 6/13 | 前田森林公園観察会 | 中止 |
| 7月 | 三角山登山観察会 | 西岡水源地自然観察会 中止 |

文責 江別市 藤田 潔

以前にエゾマツ126号(18年9月発行)で投稿させて頂きましたがその続編を執筆します。あれから、もう3年の月日が経ちました。自分の健康管理を目的に始めた朝食前の早朝散歩ですが5年以上続けることが出来、自分ながらも感心しています。散歩コースは以前も紹介した近所にある湯川公園とそれに接続する野幌グリーンモール、往復4km弱の1時間程度の道のりです。

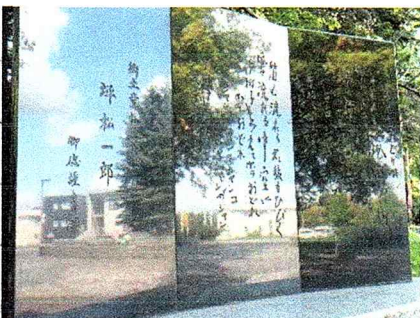
湯川公園

江別市寿町の4番通沿いにある広さ6.9ha、駐車場、トイレが3箇所もある江別でも広い公園の1つで桜の名所でもあります。元々は野幌屯田兵に入植した「湯川家」代々の土地でしたが、1989年、江別市開村100周年記念として公園化されたものです。広い敷地内には道内でも珍しいメタセコイヤの大木、樹齢100年を超えるポプラの大木、クリの大木(江別市保存樹木)もある樹林に囲まれ、開拓時代を彷彿とさせます。樹林の中には、自然池、鑑賞池、湿原、散策湿原があり、アカゲラなどの鳥類や小動物、様々樹木や草花を見ることが出来ます。

また、広さ2ha程の芝生の多目的広場や子供たちが楽しむアスレチックやバスケットコートが整備された大きな遊戯場もあり、子供から年輩の人達まで幅広い世代が楽しめる公園です。

野幌グリーンモール

国道12号線から湯川公園までの920mを周辺の環境を活かした緑のトンネルと煉瓦敷舗装からなる遊歩道でJR野幌駅より徒歩10分、1995年(平成7年)に開設されました。遊歩道沿いには、レンガ造りの野幌公民館(昭和62年:江別市都市景観賞受賞)や江別第二小学校、ステンドグラスが印象的な噴水(平成4年:手造り郷土賞受賞)、モニュメント、ガラス工芸館、桜の名所の錦山天満宮、屯田資料館(旧野幌屯田兵第二中隊本部:1884年 明治17年建設)、また江別が発祥地の「子供盆おどり唄」(シャンコ シャンコ シャンコ シャシャンガ シャンでお馴染み)



を手がけた坪松一郎の歌碑(写真)などの見所もあり、散歩道や通学路として多くの人に利用されています。

湯川公園や野幌グリーンモールは江別市制作、JR北海道、江別観光協会制作協力「健康ウォーキングマップ・野幌エリア編」のコースにも指定されています。機会があれば是非、散策して楽しんでみてはいかがでしょうか。

湯川公園や野幌グリーンモールを散歩することで春の芽吹きや新緑、秋の紅葉など四季折々の季節の変化を五感で実感し楽しむことが出来ます。これが今までの5年以上も散歩を続けられた理由だと思っていますし、今後も健康な限り続けることが出来るだろうと思っています。

また、嬉しいことがもう一つ、それは、減量に成功し(最大値より10kg減)腹回りが減少、着用不能だった衣類が着用可能に変わったことです。

健康第一 今後も持続可能な限り永遠に。

事務局だより

○ 2021年度、第1回役員会の報告

とき：8月8日(日)13:30 15:10、ところ：百年記念塔下休憩所（出席11人、欠席4人）

- (1) 今後の自然観察会等の実施について
 - ① 共催事業 自然ふれあい交流館の判断に同調する。
解説員については、事務局から希望者あて連絡の徹底を期する。
 - ② 主催事業 原則、実施する。(道の新型コロナウイルス感染症対策に準拠。) 担当(当番)は、会員の協力も得て、次のとおりとする。
 - 2021. 10. 17(日)「晩秋の森四季美コース」 阿部、藤田、加藤
 - 2022. 1. 9(日)「円山登山観察会」 熊野、菅、渡辺(早)
 - 2022. 2. 6(日)「冬の森観察会」 三井、吉田(安)
 - ③ 研修部の会員対象事業2本(エゾマツ137号4頁で既報)は、実施する。
- (2) 書面総会における会員意見への対応について
 - ① 今後の育成研修会、支部活動の見通しについて
現行の問題点を踏まえ、ボラレン入会のあり方、地方での観察会の可能性などについて、引き続き検討する。
 - ② 2022年度のみ「年会費を減額」(3,000→△1,000=2,000円)について
コロナ禍で活動は制約されたが、会費を単年度といえども減額するほどの余剰は生じていない。よって、2022年度の年会費は減額しない。しかし、活動を長期展望した場合、会員減少に伴う収入減等の危機を視野に、繰越金を慎重に管理し、一層の経費節減を心がけることが急務である。
- (3) コロナ禍における観察会実施方法(コロナ対策)について
 - ① 名簿の取扱 現行のコロナ対策マニュアル(エゾマツ136号に同封)どおり
 - ② 観察会セットの購入 非接触型体温計(2台)、消毒液の購入。保管：事務局
- (4) 観察会の危機管理について
スズメバチ、ダニ対策 救急セットの購入。保管：事務局
- (5) 育成研修会(2021.9.25-26、於：自然ふれあい交流館)の対応について
9月26日、ボラレンを説明する枠(15分間)は、会長のプレゼン対応とする
入会希望者への対応は、事務局
- (6) その他
 - ① 特定外来生物・セイヨウオオマルハナバチの防除(開拓の村前庭)について
花の開花とハチの出現期に合わせ、会員に適時の周知徹底を図り実施する。
 - ② 特定外来生物・オオハンゴンソウの防除(野幌森林公園内)について
ボラレンが森林管理署、北海道博物館、江別市などと協働し、2009年度から実施してきたが、一昨年のヒグマ騒動やコロナ禍でここ3年連続中止となった。
今後も、状況を見極めながら関係機関等と連携しつつ、機動的に対応する。

◇原点回帰「オオハンゴンソウ防除」について

会長 春日 順雄

観察会案内だけでなく、特定外来生物駆除など自然保護に対してアクティブになりたいという前会長・田村さんの意向を受けて役員会で方針決定。北海道地方環境事務所におオハンゴンソウ防除の申請、承認されました。

環境省から野幌森林公園全域のおオハンゴンソウ防除認定を受けているのは、ボラレンのみです。第1回のおオハンゴンソウ防除は、2009年7月26日ボラレン単独の実施でした。切り取った根は、私の車で自然ふれあい交流館まで運びました。その後、各機関の協力が体制が整い、今日に至っています。

主催はボラレン。協力は石狩森林管理署野幌森林公園事務所・自然ふれあい交流館・北海道博物館総務課・江別市廃棄物対策課という体制です。近年、石狩森林管理署野幌森林公園事務所の取り組みが積極的です。ホームページにも掲載してありました。

オオハンゴンソウの生きる力は強靱です。これまでのオオハンゴンソウ防除の実践から、つくづく思い知らされています。各協力機関に呼びかけてのおオハンゴンソウ防除は、特定外来生物に対する警鐘のシンボルです。ボラレンは、その活動の主催団体です。

初心忘るべからず。状況を見極めながら対応していきたいです。

「会員の近況」コーナー（新企画）

はじめに；コロナ禍が依然として猛威を振るうなか、各種観察会や研修会等がことごとく中止に追い込まれ、忸怩たる思い。しかし、ボラレン会員は様々な困難を乗り越え、各地で元気に活躍されている…。そこで、「会員の近況」欄を開設し、皆様の声を掲載していきたいと企画しました。

このほど、試行・先行取り組みとして、60%超が登録する「ボラレン・一斉メール」を活用し、緊急募集したところ、さっそく”ホットな声”をお寄せいただきました。感謝し、ご紹介します。

▷キウシト湿原は平成9年に調査を始め、平成13年に「日本の重要湿地500」に選定され、平成27年に登別市の都市公園として一般公開されました。長年関わってきた私達は法人格を取得し、保全、管理、市民や来園者に学習の機会を提供しています。コロナ禍の臨時休園や事業中止のなかで、法人・個人や市所有の関連文献(論文、報告書等)、資料(画像等)を若手スタッフとともに収集・整理をしています。 登別市 三澤 由比子

▷昨年来のコロナ対応生活、フラストレーションがたまりますね。今年は、家庭菜園に加えて山菜採りを拡大しました。

特に、山菜茶作りにチャレンジ。よもぎ茶、すぎな茶、熊笹茶を作り飲んでみました。その中で熊笹茶が気に入り、若葉を二度収穫し多くストック。”飲茶”を楽しんでいます。

でも、早く観察会がしたい！！

札幌市厚別区 福士 一徳

▷歳とともに遠出が億劫になり、最近では近場の石狩湾新港で釣りを兼ねて野鳥観察をしています。石狩湾新港は、カモメやカモなどの水鳥たちが年中見られる野鳥の宝庫。とはいっても季節によって種類、数とも大きく変化し、立春の頃は大変賑やかですが夏場のいまはオオセグロカモメとウミネコが主役。しかし、両方とも今年生まれの幼鳥が群れに混じり、成鳥ウミネコは冬羽に換羽し始めています。 札幌市北区 井澤 清美

▷近況・簡単ですが、礼文島は感染者もなく皆さん頑張って暮らしております。

観光は大打撃を受け、漁業は買い先が時短という事で、こちらもよろしくない状態です。そのような現況です。

礼文町 新山 彦司

今後も「会員の近況」コーナー、継続します。メールでもハガキでも可。奮って、ご投稿を！

なお、投稿メールの送信先アドレスは→ fisao@sky.plala.or.jp <編集部担当：藤吉>

お知らせ

◇ 次号「エゾマツ2021冬季号139」の原稿募集中

令和3年12月3日付け発行予定、次号の原稿を募っています。奮ってご投稿ください。A4版、1～2頁。編集イメージは、2021春季号(136)のP27-28をご参照ください。原稿の提出期日は、11月12日(金)まで。先ずは、ご一報の上よろしくお願ひします。なお、表紙絵のご投稿がない場合は、季節の組み写真(136号～試行中)で編集予定です。

ネット環境の有無にかかわらず、手書きやワープロ印刷での郵送も大歓迎です。

◇ ボラレン一斉メール・アドレスへの新規登録や変更、住所変更等は、事務局へ。

ボラレン登録会員向け一斉メール・アドレス、前号で誤記し誠に申し訳ありません。正しくは、hokkaido-voluran@googlegroups.com です。
会員の近況、メッセージ募集(試行・先行実施)も、このシステムにより発信しました。ネット環境のある方は、様々な情報交換のツールとして大いにご活用ください。

- ◇ ネット環境のある方は、ボラレンのホームページもご利用ください。
ボラレン・ホームページのURLは、 <http://vorulan.com/> です。
ヘッド面に「観察会の中止など」の最新の情報を随時アップしています。
各地の自然情報や地域の話題などは、「掲示板」へリアルタイムの掲載も歓迎です。
～追って、エゾマツへの寄稿（全会員の手元へ）も、よろしくご検討ください。～
なお、「会員コーナー」（会則、会報誌・エゾマツのバックナンバーなど）へのアクセス
において、パスワードの入力が求められます。所定の枠内に「volu」と入力して、画面を
開いてください。とくに、最近発行の本誌「エゾマツ」のカラー原稿がそのままご覧い
ただけ（お届けの印刷物では、費用の関係で唯一見開き面のみカラー印刷対応）ます。

----- 編 集 後 記 -----

- 記録的な高温・小雨の日照り続き。コロナ禍もあつてか、期日までの投稿がとても
少ない中、みんなで汗をかきかき、何とか編集・発行にこぎ着けることができました。
バラエティーに富んだ”玉稿”をお寄せいただき、お陰様で誌面に光彩を添えること
ができましたこと、編集部一同心から嬉しく感謝申し上げます。有り難うございました。
なお、複数名様からは、本文と組写真の素敵な投稿をいただきました。誌面繰りの関
係（本誌カラー印刷面は、見開き2頁のみ）から、一部次号以降でのご紹介にご理解を。
- 前号に引き続き、印刷・発送作業の拠点である札幌エルプラザ「札幌市市民活動サポ
ートセンター」が相次ぐ新型コロナ対策・蔓延防止、緊急事態宣言の渦中で、閉館に。
発行責任者たる会長の尽力で、人員制約のもと、”綱渡りの作業”に追われています。
先の第1回役員会も、編集会議も会場の確保ができず、夏場のみ唯一開放されている
北海道百年記念塔たもとの「休憩コーナー」で、何とか凌いでいます。
- 重ねて「原稿募集」、「会員の近況」コーナーへのご投稿をお待ちしています。
とりわけ、コロナ禍とはいえ会員の情報交換がややもすると厳しい中、「会員の近況」
コーナーを開設し、試行・先行取り組みとして一斉メールで発信し、お寄せいただきま
した。今後とも、皆さまの近況が行き交うホットな「コーナー」に育んでいきましょう。
- 編集過程で、次のとおり開催中止の報が舞い込みました。コロナ禍、憎しの心境です。
① 8/31 = 自然ふれあい交流館；ボランティア・レンジャー育成研修会（9/25-26）
② 9/10 = 研修部；道民の森での”きのこ研修会”（9/15）及び平岡公園観察会（9/19）
- * コロナ禍で外出自粛の中、オリンピックにパラリンピック、退屈こそしていないが、
長距離ドライブに行きたいです。 Y/T
- * この夏札幌では、連日の猛暑に加え雨の降らない日が続き、道路沿いの街路樹は葉が縮
み変色して痛ましい状態でした。枯れた様なカツラを目にして心痛む初秋となりました。
K/M
- * 季節が確実に進んでいる今日この頃ですが、体がなかなか付いていきません。食欲の秋！
いやいや体力増進の秋になりそうです。 K/Y
- * 春夏秋冬、月日の流れは速いものです。今年も残り4ヶ月を切りました。コロナ終息を
祈願しながら、健康と安全を念頭に、毎日を大切に過ごしましょう。 Y/Y
- * 自粛疲れ？大雪山・東大雪エリアには例年に無い多くの車が押し寄せ、地元の方は戸惑
っていると。釧路で8月21日、草花観察会（市立博物館主催）が開かれたとの報道も。 I/F



夏から秋を舞い翹を休めるナツアカネとボラレン・エンブレム

北海道ボランティア・レンジャー協議会

会報誌「エゾマツ」2021 秋季号 138

令和3年9月10日 発行

発行責任者：会長 春日 順 雄